

きっかけをつなぐ旅によう「パスポート」

PASSPORT.

徳島市退職校長会 特集

vol. **64**
FREE PAPER
地域の出来事に触れる
ソーシャルマガジン

みんなと歩く。



Editor's note 編集後記

どこまでも歩いて行きたくなる旅でした。

お遍路ってなんとなく厳格な、修行みたいなイメージを持っていたのですが、実際に体験してみるとそうでもなくて。むしろ人間味の溢れた旅であるように感じました。行き交う方々との挨拶やお接待の文化に触れ、そこに残された四国の歴史や人の営みを知り、道行く先々の自然の景色は自分を見つめ直す良き時間となりました。子どものうちにぜひ体験してほしいと心から思える素敵な時間、これからもこの旅路が続いていきますように。

— 長谷川 (構成/写真)

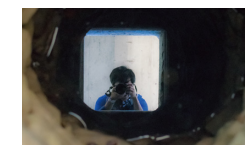
今回制作を通して驚いたのは濱尾先生の気持ちの強さ。活動は多い時で毎週されていることもお聞きし、その熱誠さに感動しました。お遍路を通して「歩く」ことは、文化に触れることはもちろん、その1日を共有することで、新しいコミュニケーションが生まれ、これからも長く…そして優しく根付いていくのではないかと思います。この冊子を読んで頂いている皆様も、是非一度みんなで歩いてみませんか。

— 神倉 (デザイン)

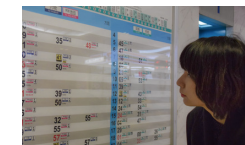
NEXT ISSUE 次回予告 2018年2月配布予定。次回の旅も是非お楽しみ下さい。

 **とくしま市ほせんがー** TOKUSHIMA NPO CENTER

発行月 2017年12月
号数 64号
発行 徳島市市民生活開発センター
〒770-0847 徳島県徳島市幸町3丁目71番地の1 幸町会館1階
[TEL] 088-611-3886
[FAX] 088-624-3860
[mail] nposhimin@fm.nmt.ne.jp
[WEB] www.tokushima-shikatsu.com



↑ 井戸を覗き込む 長谷川



↑ 汽車の時刻表をみる 神倉

ABOUT PASSPORT.

“PASSPORT.”それは皆さんを特別な旅へとお連れするチケット。行く先に広がるのは、団体の活動や人の想いに溢れた景色。見て、感じて、もっと知りたくなる。そんなきっかけをつなぐソーシャルマガジン。これを手にする皆様に、どうか素敵な出会いがありますように。

See you next time.



この広報誌に関するご意見、ご感想は発行元である徳島市市民生活開発センター(088-611-3886)までご連絡下さい。

 **とくしま市ほせんがー**

多くの人を魅了する“お遍路”。

徳島市退職校長会では小学校の遠足にお遍路を取り入れ、その活動は公民館や幼稚園にも広がりつつある。お遍路とはどういうものなのか?そこに参加する人達が見る景色をともに体感すべく、会の活動へと密着した。

退職校長会って?

— Retired head teacher.

徳島市退職校長会は会員の研修と相互の親睦を図り、本市の教育振興に寄与することを目的として昭和39年4月に発足。近年では教育支援活動として「遍路遠足サポート」に力を入れて取り組んでおり、平成28年度には10小学校総数1,000名の子どもたちが参加した。

■ プロジェクトのご参加やお問合せはこちら
[TEL] 090-4976-5634 (濱尾)

key person

元・佐古小学校 校長 濱尾先生



学ぶ、培う、たくましい心

— 地域を支える退職校長会の活動に迫る

お遍路とは?

「お遍路」とは、弘法大師(空海)の足跡をたどり八十八ヶ所の霊場を巡拝すること。八十八の煩惱を一つ一つ取り除き、自分自身を見つめ直す修行の旅。

歩いて巡るお遍路の旅

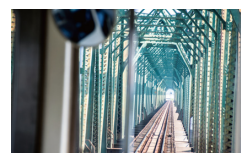
さあ、出発しよう！

迎えの汽車がやってきた。子どもたちはこれから始まる旅に期待を膨らませながら汽車へと乗り込んでいく。
「ガタン、ゴトン」とのんびりとした時間の中で様々な風景が通り過ぎていく。
ふと車内を見渡してみると、乗客の中にこれからお遍路へ行くとと思われる外国人の方がいた。



汽車に乗って…「はじめまして」

「ほら、話かけてみい！」。
先生の後押しもあり、子どもたちは恐る恐る習った英語をつかって「生懸命に話かける」。
「Nice to meet you!」。実際に海外の方と交流を図るという普段でない体験に、どきまぎしている様子はなんとも微笑ましい。



始まりの場所 霊山寺

最初に向かったのは四国八十八ヶ所の一番札所である霊山寺。道中には遍路をする人へ向けた看板やお店が目立つ。到着後にはガイドを務める徳島市退職校長会の濱尾さんから、寺の成り立ちについて話が。説明は子どもたちも興味をもちやすいように工夫が凝らされており、みな話に聞き入っていた。
「あれ？お参りつてどうするんだっけ？おじぎが先？」
教わったことをさっそく試す子どもたち。何を思い描いているのかは分からないが、みんな真剣にお祈りをしていた。



お接待の文化に触れて

続いて一番札所の極楽寺へ向かう。普段は何気なく通り過ぎてしまうような場所でも歩いてみると様々な発見がある。道端に生える植物、田んぼの中にいる生き物、橋から見下ろす川の流れ、目に映る1つ1つの景色がなんだか新鮮で、心に返らされる。

また、道中では他のお遍路中の方々とすれ違い「頑張ってください！」と声をかけあったりもした。濱尾さん曰く、道行く方からお菓子や飲み物を頂いたりすることもあろうと、それが長きにわたるこの土地に引き継がれるお接待の文化だという。



小さな冒険の 終わり

帰りは板野駅から汽車へ乗り込み、佐古駅へ。始まる前は随分と遠い道のりに思えたが、終わってみればあっという間である。

子どもたちの感想からは「また続き行ってみよう！」との声があがり、八十八ヶ所なんてすぐ制覇してやると言わんばかりの様子だ。そんな先への期待を残しつつ、お遍路遠足という小さな冒険は終わりを迎えたのだ。



願いが叶う抱っこ地蔵



極楽寺に辿り着き、まずはその成り立ちについてのお勉強を。その後には長命杉の大きさに圧倒されたり、抱っこ地蔵を持ち上げてみたり、鐘を打ち鳴らしてみたりと、各々興味をもつスポットへと散らばっていた。特に「軽く感じたら願い事が叶う」と言われている抱っこ地蔵は子ども心をくすぐる面白さもあり大人気だった。

繋がる知識、 歴史を感じる

三番札所金泉寺への道のりは少し遠く、極楽寺から40分ほど歩くことになる。茂みをつぎよるような道を通ったり、木々に囲まれた道があったり、これまでとはまた少し雰囲気が変わっていく。
今回のお遍路の最終地点となる金泉寺、歴史についての話の中に行基という人物が出てきた。「あー社会で習った!!」学校で覚えた知識と、自身が今目にしている場所とが繋がった瞬間である。知っていることと結びつくことでより身近に歴史を感じることができたようだった。

長寿をもたらす黄金の井戸



そして金泉寺の名前の由来となった「長寿をもたらす黄金の井戸」については、水面にはつきりと自分の顔が映れば92歳まで生きるといわれており、子どもたちはこぞって水面を覗きに行き。中には「俺5回見たけん、460歳まで生きる！」なんて子どもいたりして。

「いつか四国八十八ヶ所を
まわってみたいなと思いました。」

子どもたちの
感想文より抜粋

また続き
行ってみよう!





徳島市退職校長会顧問

濱尾 巧久

Yoshihisa Hamao

「歩くことが極端に減ってしまった」と、徳島市退職校長会顧問の濱尾さんは言う。車社会と言われる現代。特に徳島のように公共交通機関網が十分に整備されていない地域では子どもたちの体力低下が問題視されている。

お遍路を遠足に取り入れた「子ども歩く遍路遠足」。子どもたちに歩くことの楽しさや歩き通せたときの達成感を味わってほしい、そしてこの素晴らしい文化遺産と田園風景を伝え残していきたいという想いから6年前に始まった。今回同行させてもらったのは佐古小学校の遠足だ。

「ひろい自然の中でのびのび仲間と触れあう時間、友達と色んな話ができたっていうのが嬉しいみたいだなあ。あとはやっぱり達成感？マラソンと一緒じゃな。15kmっていう今まで歩いたことない距離を本当に歩きされるのかっていうのが、生徒も学校の先生も不安に思っているから行くんよな。だからこそ、無事に終わったときの達成感がすごい。」

しかし、この「子ども歩く遍路遠足」を実施するに至るまでには入念な準備が必要である。子どもたちに十分に楽しんでもらうことはもちろん、学校や保護者に安心してもらうためにはどのよ

また、全く別日に開催された佐古公民館の「歩き遍路体験」にも参加した。こちらはすぐらむ学級活動の一環として導入され、同じく退職校長会がガイドを務めるものであった。このお遍路に同行するまで思っていたことがある。それは、子どもたちにとってお遍路というのは少々退屈に感じてしまうのではないかと。ということだ。非常に素敵な文化を体験できる有意義な時間であることは間違いないだろうとは思いつつも、「遠足」というイメージとはなかなか結びつかなかったのだ。しかし実際に同行して見た子どもたちの様子は、本当に楽しそうだった。

うなサポートをすれば良いのか、何度もコースの下見を繰り返したという。トイレの場所や昼食の場所も考えなければならぬ。体調不良者が出た場合の想定も必須である。忙しいときには毎週のように案内をする月もある。それでもこの活動を続けていく原動力となっているものは何なのか？

「旅を終えたときの子どものたちの表情みたらなあ、ごつつい嬉しいなるんよ。あとは子どもたちが書いてくれた感想とか手紙がな、私にとっては大事な宝物なんよ。」

ただ純粋に子どもたちの笑顔が、成長が嬉しいのだと話す濱尾さん。歩く、ということが体力づくりや健康維持に繋がりが、巡拝することで地域の文化・歴史に触れることができる。そしてお接待というおもてなしが人との心の関わりをさせてくれる。そんな「子ども歩く遍路遠足」は既に来年の予定もびつしりだ。未来へ紡ぐ子どもたちの可能性「四国遍路」の文化を継ぐ若者の成長を見守り続ける濱尾さんの表情は、退職してなお、教師そのものであった。

※ すぐらむ学級とは

生涯学習活動の推進として、地域住民自らが現代的課題について学習して課題解決に取り組む機会を提供する地区公民館活動の事業のこと。今年から佐古公民館が始めた「歩き遍路体験」はこの事業の一環。

key person **INTERVIEW**

Q. なぜお遍路を始めようと思ったんですか？

Answer. こんな素晴らしい、お遍路の文化をやっぱ子供たちにもなあ、伝えたら喜んでくれるかなあと思って始めたんよ。

